鳥取短期大学研究紀要第57号（2008）

〈研究ノート〉

学生の地域活動への参加意欲に関する考察
―「第11回因幡の手づくりまつり」アンケートから―

杉　本　真由実・板　倉　一　枝・國　本　真　吾

Mayumi SUGIMOTO, Kazue ITAKURA, Shingo KUNIMOTO：
A Study of College Students' Motivation for Participating in Regional Activities
—From the Questionnaires of "The 11th Inaba Handmade Festival" —

地域活動への参加を通じた学生教育の在り方を深めるにあたり，本稿では「第11回因幡の手づくりまつり」に学生スタッフとして参加した学生対象の調査から，特に満足度や参加意欲といった主体形成の要因となりうる項目の分析を行った．結果からは，活動における交流経験の効果や，集団編成の工夫といった内容が，参加の満足度や次回への参加意欲を高める要因として明らかとなった．参加の段階の高次化を通じた主体形成を考える上でも，これらの結果を踏まえた条件整備が求められる．

キーワード：学生教育　地域活動　参加意欲　参加・参画　大学生

はじめに

大学をはじめとした高等教育機関に対して，地域社会からの要請が多様化する中，地域社会を一つの学生教育の場とした教育の展開が注目されている．

例えば2008年３月現在，国立情報学研究所が提供する「CiNii 論文情報ナビゲータ」で，「地域／活動／学生／参加」の語で検索を行うと，67件の論文が抽出された[1]．図１は検索結果をもとに，論文の発表年次ごとで表わしたものである．1990年代後半から次第に数が増し，世紀転換期を挟み，2005年が10件，2006年が13件，2007年が７件となっている．その要因として考えられるのは，大学側が地域との連携を積極的に進めていること，またGP(Good Practice）に代表される競争的資金をもとにした教育プログラムなどの影響が関連していると推察される．

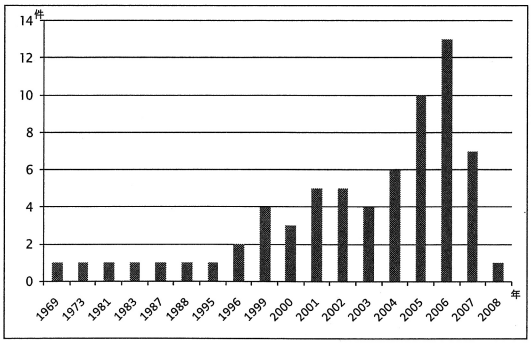

図１　CiNiiでの論文検索結果

その一方，1995年の阪神・淡路大震災を契機としてボランティア活動への参加が増し，行政もボランティアやNPO組織を活用した事業を，積極的に推進している状況へと変化した．まさに，大学・地域・行政のそれぞれの思惑が交錯する中で，その中心に位置する学生に注目した研究も，学生教育の観点から取り組まれている最中である．

國本・板倉・塩野谷・土井は，地域において開催した手づくりまつりの活動を通じ，スタッフとして参加した大学生の主体形成に注目した研究を行った（以下，前報告）[2]．そこでは，「参加」の段階が運営面に影響を与えることを明らかにしている．

本稿ではその成果を踏まえ，学生が地域活動に参加することを通じて，何に満足し，また何を得たかについて深めることとした．

1．調査の概要

(1) 調査の目的

地域活動に参加する中で，学生たちは何を期待し，何に満足し，また何を得ているのかということが，学生教育における主体形成を検討するにあたり重要な示唆を与えるものと考える．そこで，本調査では，「第11回因幡の手づくりまつり」を事例として，学生スタッフで参加した学生に対する意識調査から，地域活動への参加意欲の要因について考察する．

(2) 調査方法及び対象

「第11回因幡の手づくりまつり」に学生スタッフとして参加した，鳥取短期大学の学生34名を対象に調査用紙を配布した（章末資料参照）．調査時期は，2007年７月である[3]．

調査項目は23問で，部分的に自由記述を設けた．設問への回答は，「そう思う」，「やや思う」，「あまり思わない」，「まったく思わない」，「わからない」のいずれかを選択する５件法を採った．

2．調 査 結 果

(1) 回収率及び回答者の属性

調査用紙は，28名から回収した（回収率82％）．回答者の属性・内訳は，鳥取短期大学生活学科食物栄養専攻の学生18名（１年生６名，２年生12名），同住居・デザイン専攻の学生２名(いずれも２年生)，幼児教育保育学科の学生７名（すべて１年生），専攻科福祉専攻の学生１名である．当日の役割別で整理すると，鳥取短期大学が企画した「ミルフィーユ」と「たこ焼き」のブースを担当した学生が12名，鳥取大学の企画や智頭街道商店街が企画したブースを担当した学生が14名，受付や運営補助を担当した学生が２名である（表１参照）．

表１　回答者の属性

	本学ブース	外部ブース		計
		ブース	運営	
食物栄養専攻	12	5	1	18
住居・デザイン専攻	0	2	0	2
幼児教育保育学科	0	7	0	7
専攻科福祉専攻	0	0	1	1
計	12	14	2	28

(2) 調査結果の概要

以下では，調査項目の中から，学生教育における主体形成に関わった要因となりうる，満足度や参加意欲の要因を探る上で，参考となる質問項目を選定し，その結果を報告する．なお，鳥取短期大学企画のブースを「本学ブース」，その他を「外部ブース」（全体運営含む）と担当別で整理し，必要に応じて属性別で分析した．分析に際しては，有効回答のものを用いている（表２参照）．

１）満足度について

「今回の『因幡の手づくりまつり』に参加して良かった」（問１）と答えている学生は25名であった．その理由（付随の記述回答）としては，「他大学の学生，地域の人と関わることができた」としている者が８名，「参加した子どもと関わることができた」としている者が９名，その他の理由を挙げている者が５名であった．

２）ブース内での意思疎通

「ブースの仲間とよく話し合い，意志疎通は出来た」（問７）としている学生は，27名であった．外部ブースを担当した学生に注目すると，15名（93％）が「そう思う」また「やや思う」と肯定的な回答を

表２　「第11回　因幡の手づくりまつり」に関する学生スタッフ調査回答一覧

No	学年	担当ブース	問１	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14	問15	問16	問17	問18	問19	問20	問21	問22	問23
1	1	本学ブース	5	4	4	3	5	4	4	5	3	4	1	4	3	5	4	4	5	4	4	5	3	4	4
2	1	本学ブース	4	5	5	1	3	5	5	5	5	3	5	5	5	4	5	1	4	5	5	5	3	5	1
3	1	本学ブース	5	N/A	4	4	4	5	5	N/A	N/A	N/A	N/A	5	5	4	4	4	1	5	5	5	4	5	4
4	1	本学ブース	4	5	4	4	4	4	5	4	3	3	3	4	5	4	5	3	2	3	4	4	5	1	1
5	1	本学ブース	4	4	5	3	3	4	4	4	4	4	4	3	3	5	5	4	4	5	5	5	3	5	1
6	1	本学ブース	4	4	5	4	4	5	4	1	5	4	5	5	1	4	5	4	4	5	5	4	3	4	4
7	2	外部ブース	5	4	5	4	4	4	5	5	4	5	3	5	5	5	5	5	5	4	4	5	5	5	5
8	2	本学ブース	4	5	3	4	4	3	4	5	5	4	4	3	3	4	5	5	3	4	3	5	3	4	1
9	2	本学ブース	5	5	4	4	5	5	5	5	4	4	5	4	3	4	5	5	3	4	4	4	2	4	4
10	2	本学ブース	5	4	5	3	5	4	5	5	4	5	4	4	3	5	4	4	3	5	4	5	3	5	4
11	2	外部ブース	5	5	4	3	4	1	4	5	2	3	1	4	5	5	5	5	5	2	3	4	4	5	5
12	2	本学ブース	4	5	4	1	4	4	4	5	5	4	4	4	5	5	5	5	5	4	4	5	4	4	1
13	2	本学ブース	5	5	5	4	4	4	4	5	5	4	5	5	5	4	5	4	2	4	5	5	2	5	1
14	2	外部ブース	5	4	5	1	5	4	5	5	5	5	5	5	5	4	5	4	4	3	4	4	4	4	1
15	2	外部ブース	5	3	5	3	5	1	5	5	2	5	5	5	4	5	4	5	5	4	5	5	5	5	4
16	2	本学ブース	4	4	3	2	4	4	5	5	4	4	4	4	5	4	5	4	4	5	5	5	3	4	1
17	2	外部ブース	4	5	5	2	4	2	5	5	5	5	1	4	4	4	4	4	4	2	4	4	4	1	1
18	2	外部・運営	N/A	5	4	5	4	4	5	5	5	5	3	4	5	5	5	4	3	5	5	4	4	4	4
19	2	外部ブース	4	4	4	1	4	1	4	1	1	5	1	4	5	4	4	4	5	4	4	5	4	1	1
20	2	外部ブース	4	4	4	1	4	4	4	4	1	4	1	5	5	5	4	4	4	4	5	5	5	5	1
21	1	外部ブース	5	4	5	4	4	4	4	5	4	4	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5
22	1	外部ブース	4	4	4	4	4	3	4	4	3	4	3	4	4	4	4	4	5	3	4	5	4	5	4
23	1	外部ブース	5	5	3	3	4	5	5	4	4	4	5	5	5	4	4	4	5	5	5	5	4	5	1
24	1	外部ブース	1	5	4	2	3	1	4	4	4	4	4	4	3	4	1	1	4	1	4	4	4	1	1
25	1	外部ブース	5	5	4	3	4	5	4	1	5	4	5	4	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5
26	1	外部ブース	N/A	3	3	1	4	2	4	4	2	5	2	1	5	5	5	5	5	5	5	5	2	5	5
27	1	外部ブース	5	4	N/A	3	4	3	5	5	5	3	5	5	5	3	5	5	5	5	5	5	5	5	4
28	1	外部・運営	4	1	N/A	1	3	N/A	3	2	1	4	1	1	5	5	1	4	1	1	2	5	5	5	1

※担当ブース名の回答は，回答者の特定を避けるため，本結果一覧では「本学ブース」「外部ブース（または外部・運営）」と表記している．
なお，ブース名の網掛けについては，当日担当箇所が変更となったものである．
※各設問の回答については，５が「そう思う」，４が「やや思う」，３が「あまり思わない」，２が「全く思わない」，１が「わからない」を意味する．無回答は，N/Aとした．

行っており，他大学の学生スタッフと，意思の疎通が図れたと感じている学生も多い．

3）事前練習の効果

まず，準備段階で見た場合，「手づくりまつり前に，ものづくりの練習は十分出来た」（問９）との問いに対して，「そう思う」「やや思う」と回答している学生は，本学ブース９名（75%），外部ブース９名（56%）であった．逆に，十分に練習が出来なかった，または分からないことを意味する回答を行っている学生は，本学ブース２名（16%）に対し，外部ブースが７名（43%）となっている．これは，他大学や指導者のところを訪問して相手と事前の練習を行うというのが，時間的にも難しかったことが原因ではないかと推察される．

関連して，「手づくりまつり前の練習時間は，適正であった」（問11）との問いには，本学ブース９名（75%），外部ブース７名（43%）が，「そう思う」「やや思う」と回答している．本学ブースの学生に肯定的な回答が多い理由は，同じ大学のメンバー同士で構成される集団ということで，事前の練習を行うにも，集まりやすい，時間調整がしやすいという理由が関係していると言えるであろう．

4）連絡・伝達について

「スタッフ同士の連絡は，十分出来ていたと思う」（問18）との問いには，本学ブース11名（91%），外部ブース10名（62%）が「そう思う」「やや思う」と回答した．学内でも同じ専攻同士で構成された本学ブースでは，連絡・伝達も十分に行なわれていたが，距離が離れた大学の学生との連携が必要な外部ブースは，物理的距離を克服することが十分でなかったことが言える．

5）大学間交流

「他大学の学生スタッフと交流することが出来た」（問21）との問いに，「そう思う」「ややそう思う」と回答している学生は18名である．その内の15名が外部ブースを担当した学生であり，手づくりまつりを通じて大学間交流が図られているのは，外部ブースの学生に偏っていることが確認された．

6）巻き込み意欲

「手づくりまつりに，仲間をもっと誘ってみたいと思った」（問16）との問いに「そう思う」「やや思う」と回答したのは，本学ブース10名（83%），外部ブース15名（93%）である．特に，「そう思う」と答えた10名の内，７名は外部ブースを担当した学生であった．この７名をさらに掘り下げると，３名一緒で鳥取大学企画ブースを担当した者，１名は複数の本学学生とともに商店街企画ブースを担当した者，１名は単身で商店街企画ブースを担当した者，残り２名はそれぞれ単身で鳥取大学企画ブースを担当した者である．他大学の学生が主導する外部ブースに本学から一人で加わった学生は，一人で参加することに心細さを感じ，同じ大学の仲間を誘いたかったということが考えられるだろう．しかし，問21の回答を見ると，他大学のスタッフと交流できたと回答し，問１の満足度も高いことから，他大学の学生と一緒にブースを準備することで，楽しさややりがいを感じ，大学間交流に十分満足したことがうかがえる．そのことから，自分の仲間にも一緒に楽しんで欲しいという思いが生まれたのではないかと考えられる．

7）次回への参加意欲

「次回（2008年予定）もスタッフで参加したい」（問23）の問いに，「そう思う」と回答した学生は５名で，いずれも外部ブースを担当した学生であった．５名の問１における満足度は「そう思う」であり，４名が問21では他大学の学生スタッフとの交流を「そう思う」「やや思う」と回答している．加えて２名の学生は２年生であり，卒業後も継続して参加したいという思いを持っていることは興味深い．

しかし，問１で参加して良かったかの問いで「そう思う」と回答した群が，問23の次回への参加意欲において，得点平均3.6であるのに対し，「やや思う」と回答した群が問23では得点平均1.5と，大きな開きが確認された．

(3) 自由記述から

ここでは，問１の自由記述で，「他大学の学生・地域の人との関わり」といった「交流」に関した内容を回答している者を取り挙げてみる．

参加したことでの満足度の理由について，自由記述での記述を見ると，「たくさんの子どもたちと触れ合えた」といった子どもとのふれあいを挙げた者が９名，「他大学の人，授業では関わらない人，いろいろな人」との交流を挙げた者が13名いた．このように，地域活動を通じて「ふれあい」や「交流」に関する経験が，満足度の理由として挙がってくるのは興味深い．中でも，「規模の大きいイベントに参加して，様々な人と出会い，大学の雰囲気を感じることができました」と回答している学生は，他大学の学生との関わりを通じて，自大学では味わえない雰囲気を体験したことがうかがえる．

(4) 小　括

本調査結果から確認されたことを小括すると，学生が地域活動に参加した際，そこに集う参加者や他大学の学生スタッフとの交流の有無が，次回への参加意欲に影響していることが言えるだろう．参加したことの満足度が高い学生は，次回への参加意欲も高く，参加の継続性を考える上で貴重な示唆を与えるものである．

また，集団の編成方法，当日までの連絡の状況，打ち合わせや事前の練習回数の設定なども，学生の参加意欲に心理面で影響を与えていると考えられる．

3．討　　論

(1) 当日の担当変更による影響

「第11回因幡の手づくりまつり」は，鳥取市内の智頭街道商店街で開催する予定で準備が進められた．しかし，前日の悪天候を考慮して，急遽当日の会場を鳥取県立県民文化会館(現とりぎん文化会館)に移して開催したため，企画したブース内容を変更するなどの対応をとった．それにより，学生スタッフが担当予定の企画ブースのいくつかは中止となり，当日は別のブースの補助へと回った学生スタッフが回答者の中にもいる．そこで，当日の急な担当変更が及ぼした影響について，まず取り上げて考察したい．

「バンバン鉄砲」を担当した３名の回答者（№7・11・15）は，元々商店街企画ブースを担当する形で準備を行った．上記のような当日の状況から，鳥取大学企画ブースの「バンバン鉄砲」へ当日の担当が変更になった．この３名の回答を見ると，次回への参加を問う質問に，「そう思う」「やや思う」と積極的な回答をしている．

また，同じく商店街企画ブースの「楽器を作ろう」を担当した２名の回答者は，当日は１名が鳥取大学企画ブース「紙ひこうき」へ（№19），残り１名は同じく「光る泥だんご」へと変更となった（№20）．この２名は，次回への参加に関しては「わからない」と回答している．

これらの，事前に準備を重ねていた企画ブースを中止して，別のブースへ移った回答者たちの共通点は，いずれも“当日，担当ブースが変更になった”ということ，そして学年が「２年生」（短期大学での最終学年）であることである．しかし，３名で別のブースに移った回答者と，一緒のブースで準備をしてきた２名の回答者が，当日は別々のブースに移ったことにより，その両者間で次回への参加意欲の部分での違いが確認される．このことから，単身で他大学のブースに加わって学生と交流するより，同じ属性（同大学もしくは同学科）の仲間とともに他大学の学生と交流する方が，この種のイベントや地域活動をより楽しむことができると考えられる．普段から繋がりのある仲間が，いわば「心の杖」となり，仲間との共感・共有で他大学の学生や地域との交流することが快体験となるのだろう．つまり，前報告で取り上げた「参加の３段階」の第２段階「参与」（かかわる）という，集団内での関係的な部分参加の中から，積極的な姿勢を持っていることが確認できる[4]．学生間交流や地域活動において，それ

表３　ブース属性別得点平均一覧

	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12
本学ブース	4.4	4.2	4.3	3.1	4.1	4.3	4.5	4.1	3.9	3.6	3.7	4.2
外部ブース	3.8	4.1	3.7	2.6	4.0	2.8	4.4	4.0	3.3	4.3	3.1	4.1

問13	問14	問15	問16	問17	問18	問19	問20	問21	問22	問23
3.8	4.3	4.8	3.9	3.3	4.4	4.4	4.8	3.2	4.2	2.3
4.7	4.4	4.1	4.3	4.4	3.6	4.3	4.7	4.3	4.1	3.0

に参加する学生が次も参加したいと思えるようになるためには，このような結果を踏まえた集団編成の工夫が参考となる．

(2) ブース属性間での差から

上記のことから，次回への参加意欲という点をさらに注目してみる．その理由としては，学生が継続して地域活動やボランティア活動に関わることは，学生の主体形成上も不可欠なことであるという，前報告の成果からである．

先に述べたように，参加による満足度と次回への参加意欲に関しての相違が確認されたが，ここでは本学ブースと外部ブースという属性別での相違について見てみよう（表３参照）．

満足度（問１）に関して，本学ブース回答者の得点平均は4.4，外部ブース回答者の得点平均は3.8と，両者間で0.6ポイントの差が確認された．また，次回への参加意欲（問23）に関しては，本学ブース回答者の得点平均が2.3，外部ブース回答者の得点平均が3.0と，逆に0.7ポイントの差となっている．

満足度そのものでは，普段から関わりの強い学科集団・仲間で構成された本学ブースの方が高いわけだが，他大学との交流度（問21）を見ても，本学ブース回答者の得点平均が3.2に対して，外部ブース回答者の得点平均が4.3と，1.1ポイントの開きがある．大学間交流や巻き込み意欲に関わる他の項目を参考にすると，次回への参加意欲を高めるためには，日常の大学内での集団・仲間の枠を超えた関係づくりや交流の機会を設けることが，学生が地域活動に関わる際には効果が高いことがうかがえる[5]．

しかし，当日の担当変更による影響を踏まえて考えると，学生を一人ひとりの個で切り離して交流を図ろうとしても，その効果は上がりにくい．よって，同じ大学・学科で構成する複数の学生集団と，他大学の集団で交流していくことが，その効果を高める要因となっていくだろう．

おわりに

今回の調査から考えられることは，学生たちの地域活動への参加において，イベントの趣旨に共感・理解することもさることながら，地域住民や他大学の学生との「交流」という経験が，次回への参加意欲へと繋がる重要なポイントとなっていることである．今回確認された，前報告での「参加の３段階」での第２段階を踏まえると，続く第３段階「参画」（にないあう）をどのように次回への参加によって達成していくかが興味深いところである．

次回への参加意欲は，ボランティア活動の原則[6]の中の「継続性」に関わるものであり，地域活動やボランティア活動においては，継続した参加が重要視されている．学生教育の視点に立てば，地域活動に継続して参加する中で，参加の段階を高次化させるための条件を整えていくことが課題となろう．特に，今回確認された「交流」経験，そして「集団編成」の工夫といったことが重要な要素となるため，そのコーディネートにおいては留意する必要がある．この点に関しては，今後も引き続いて追跡調査を行うことにより，さらにその中身を明らかにすることが課題である．

［付記］アンケート用紙の配布・回収にあたっては，「第11回因幡の手づくりまつり」の鳥取短期大学ブースに関わった本学生活学科食物栄養専攻の永井奈津子・下地葵助手に協力いただいた．記して感謝申し上げます．

≪注≫

1）国立情報学研究所・論文情報ナビゲータ http://ci.nii.ac.jp/

2）國本真吾・板倉一枝・塩野谷斉・土井康作「地域活動を通した学生の主体形成に関する研究―『第８回伯耆の手づくりまつり』アンケートから―」『鳥取短期大学研究紀要』第54号，pp. 73～82，2006年．

3）調査用紙は，学生スタッフとして参加した鳥取大学・鳥取環境大学の学生にも，同じものを配布し回収した．本稿では，鳥取短期大学の学生に配布・回収したものに限定して，分析を行った．なお，事例対象とした「第11回因幡の手づくりまつり」は，2007年６月９日に鳥取県立県民文化会館にて開催された．参加総数は約1,600人で，学生スタッフは３大学合計150名である．「第11回因幡の手づくりまつり」に関しては，國本真吾「『因幡の手づくりまつり』における発達の視点―現代の子ども・大学生の教育と地域づくり―」『鳥取短期大学研究紀要』第56号，pp. 31～36，2007年，においても紹介されている．

4）前報告で取り上げた「参加の３段階」については，林義雄「『学習する組織』を体験的に学ぶプログラムの可能性―大学における参画授業の実践から―」日本社会教育学会編『日本の社会教育第48集・成人の学習』東洋館出版社，pp. 241～252，2004年，を参照．

5）本学ブースは調理体験（たこ焼き・ミルフィーユ）を行ったが，参加の契機は教員側からの声かけにより学生の参加へと至った．状況から見れば，「参加の３段階」における，第１段階「参集」（いあわす）の段階であるといえる．しかし，参加のきっかけ自体は教員の誘いに因るところではあっても，学内で実施した調理体験を，別の学外の場で実施したということによる満足度の高さと読み替えれば，その後の学生の主体形成につなげる上でも貴重な経験であったと評価できるだろう．

6）一般的に，ボランティア活動の原則といった場合，「主体性・自主性」，「無償性・無給性」，「社会性・連帯性」，「創造性・先駆性」，そして「継続性」が強調されている．

2007年7月

「第11回 因幡の手づくりまつり」に関する学生スタッフ調査

この度は、「第11回 因幡の手づくりまつり」の学生スタッフとして協力していただき、ありがとうございました。今後の運営における参考資料・研究のため、本調査への回答をお願いします。なお、回答に際してはあてはまる数字に○をしてください。また、本用紙に記入していただいた個人情報は、集計・研究上の目的以外では使用しません。

・回答者氏名（　　）　年齢：（　　）歳　性別：（　男　・　女　）
・回答者所属（　　）大学（　　）　学科　・　専攻（　　）年
・参加ブース：1）ものづくり体験ブース → ブース名（　　）
　└▶ 役割（あてはまるものに○）　講師　・　チーフ　・　スタッフ
　2）その他（　　）
・そ の 他：2007年6月開催の「因幡の手づくりまつり」には（　　）回目の参加
→該当する部分に○印　手引き書を書いた（　　）、当日までに智頭街道へ行ってみた（　　）、事前の全体会に参加した（　　）
　前日準備に参加した（　　）、当日の後片付けを手伝った（　　）、当日の打ち上げに参加した（　　）

※本調査用紙の提出は、下記の各大学の教員まで提出してください。**7月17日（火）〆切**
①鳥取大学 → 土井康作先生・塩野谷斉先生・小林陽子先生（地域）、長島正明先生（工）
②鳥取短期大学 → 國本真吾先生・杉本真由実先生（幼教）、板倉一枝先生（地域交流センター）
③鳥取環境大学 → 木俣信行先生（環デ）

	そう思う	やや思う	あまり思わない	全く思わない	わからない
問1 今回の「因幡の手づくりまつり」に参加して良かった。 → なぜそのように考えますか。 ［　　］	5	4	3	2	1
問2 あなたは、自分が担当したブース・役割の準備に意欲的に取り組んだ。	5	4	3	2	1
問3 自分が担当したブースや役割は、思ったように進めることが出来た。	5	4	3	2	1
問4 手づくりまつりで、失敗したということはなかった。 → なぜそのように考えますか。 ［　　］	5	4	3	2	1
問5 手づくりまつりでは、自信を持って教えることが出来た。	5	4	3	2	1
問6 手づくりまつり前に、適正に材料や道具をそろえることが出来た。	5	4	3	2	1
問7 ブースの仲間とよく話し合い、意思疎通は出来た。	5	4	3	2	1
問8 道具操作の技能は身についた。	5	4	3	2	1
問9 手づくりまつり前に、ものづくりの練習は十分出来た。	5	4	3	2	1
問10 手づくりまつりにおいて、子どもたちへ適切な対応が十分出来た。	5	4	3	2	1
問11 手づくりまつり前の練習時間は、適正であった。	5	4	3	2	1
問12 手づくりまつりでは、安全性に考慮して作業準備ができた。	5	4	3	2	1
問13 手づくりまつりでは、参加者はケガをすることはなかった。	5	4	3	2	1
問14 手づくりまつり当日に接した子どもたちは、満足していた。	5	4	3	2	1
問15 子どもたちに、もっと自分のブースに来て欲しいと思った。	5	4	3	2	1
問16 手づくりまつりに、仲間をもっと誘ってみたいと思った。	5	4	3	2	1
問17 自分が担当したものの他に、担当したいブースがあった。	5	4	3	2	1
問18 スタッフ同士の連絡は、十分出来ていたと思う。	5	4	3	2	1
問19 地域の商店街と連携した今回の取組みは、良かったと思う。	5	4	3	2	1
問20 この取り組みは、地域の活性化に役立つ。	5	4	3	2	1
問21 他大学の学生スタッフと交流することが出来た。	5	4	3	2	1
問22 手づくりまつりは、今後も大学全体からボランティアが集まり、取組む意義がある。	5	4	3	2	1
問23 次回（2008年予定）もスタッフで参加したい。	5	4	3	2	1

ご協力ありがとうございました。